

氏名	NAW SAY SAY PWE	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6077 号	
学位授与の日付	2019年9月25日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)	
学位論文題目	Christian Missionary Activities in Irrawaddy Delta During Colonial Period (c.1850-1947) (植民地時代(1850 頃-1947)イラワディ・デルタにおける キリスト教宣教活動について)	
学位論文審査委員	准教授 土口史記	准教授 徳永誓子
	准教授 渡邊佳成	名古屋大学准教授 土屋洋

学位論文内容の要旨

ミャンマーにおけるキリスト教の歴史については、これまで19世紀前半における初期の宣教活動およびその後のカレン州、テナセリム管区におけるバプティスト派の活動、植民地の首都ラングーンにおける活動などに焦点が置かれ、バセインを中心とする下ビルマにおける宣教活動やキリスト教を受容したカレン族の人びとの動向についてはほとんど解明されてこなかった。Naw Say Say Pwe の学位請求論文“Christian Missionary Activities in Irrawaddy Delta during Colonial Period (c. 1850-1941)”(植民地時代(1850 頃-1941)イラワディ・デルタにおけるキリスト教宣教活動)は、宣教師の日記、キリスト教会の記録、イギリス植民地政庁の行政記録などを渉猟し、下ビルマのイラワディ・デルタ地区におけるキリスト教の布教活動について詳細な事実を明らかにし、カレン族に与えた影響について詳しく論じた労作である。

第1章「イラワディ・デルタにおけるキリスト教の到来」では、先行研究に依拠して、初期のキリスト教布教の様相、とくにカレン族がキリスト教を受容した歴史的背景(「失われた書物」伝説)などを紹介した後、19世紀後半以降のデルタにおけるキリスト教各派の布教活動とカレン族のキリスト教受容について丹念に跡づけ、特にスゴー・カレン族に対するバプティスト派の宣教活動が、カトリック教会やイングランド国教会の活動、プウォー・カレン族に対するバプティスト派の活動より、大きな成功を収めたことを明らかにし、1930年代以降には、アメリカを中心とする白人宣教師の手を離れてカレン族の宣教師が中心的な役割を果たすようになり、布教の土着化が進んでいっ

たことを明らかにした。

ついで、第2章「ビルマの教育制度とイラワディ管区におけるミッションスクールの創始」においては、まず、イギリス植民地支配による近代教育の導入について概観し、試行錯誤を繰り返しながら、マコーレーの計画案に基づいて種々の補助金による学校の創設・運営が進められていった中で、キリスト教各派も布教活動と連動させてデルタ各地に初等学校から高等学校までの各レベルの学校を開設しカレン族のみならず地域の子どもたちの教育に大きく貢献していった。

なかでも大きな成果をあげたのが、バプティスト派によるスゴー・カレン族を主たる対象とした教育活動であった。1852年に初めてバセインで創設され、その後も各地で開設されたミッションスクールでは、聖書のみならず、英語、数学、地理、歴史、保健などが教えられ、さらに男子には技術、女子には家庭科など実務的な教育も重視されていた。教育言語は英語もしくはカレン語であったが、後には卒業後の実社会での必要性からビルマ語も使用されるようになった。そのほか、一部の学校では、学校の運営費、施設費をまかなうためであると同時に生徒の職業実習として、精米所や製材所、印刷工場などを附設し経営していたことを明らかにした。また、1930年からは、宗教面同様、学校運営にもカレン族の教師が携わるようになり、教育の土着化が進行していった。これらの教育活動を通じて、カレン族の社会進出が進み、教育や宗教方面のみならず、官界や実業界に進み成功を収める人びとも多く輩出していった。

第3章「植民地期イラワディ・デルタにおけるキリスト教教団による保健衛生活動」では、キリスト教各派の行った保健衛生啓蒙活動や医療行為、看護婦養成などの諸事業について丹念にその足跡を明らかにしていった。なかでも特筆に値するのは、バプティスト派の宣教師メイソンが英語およびスゴー・カレン語で病理学の本を著し、病気の原因や薬の処方について解説したことである。また、バプティスト派の牧師やイングランド国教会の司祭たちは、官立の病院が整備されていない村落地方に巡回医療を行い、伝染病の予防に努めるとともに衛生保健知識の普及に貢献していった。これらの活動によって、カレン族は伝染病から自らの身体を守ることを知り、西洋流の治療方法に親しみを覚え、近代的な衛生観念を持つようになっていった。そして、教育同様、カレン族の医師や看護婦が活躍するようになり、医療保健分野でも土着化が進行していった。

第3章の後半では、そうした中の代表的な人物としてサン・C・ポーとバタンチェイン二人の事績を掘り起こし明らかにしている。バセインのスゴー・カレン学校を卒業したサン・C・ポーは14歳で宣教師に連れられてアメリカに渡り10年の歳月をかけて医者資格を獲得した。同年に帰国したポーは植民地政府の医官として採用されバセイン病院に勤めた後、バセインで薬局兼医院を開設、ペスト流行に際して当時まだあまり知られていなかった予防接種を導入し、伝染病の拡大を防ぐことに成功する。第4章で考察されるカレン民族意識の覚醒にも大きな貢献をした人物としても有名で、後にカレン族で唯一の立法府議会議員となる。

バタンチェインは、バセインのパプティスト・ミッションスクールを卒業後、ラングーン・カレッジで文学士を獲得、その後イギリスのエディンバラ大学に留学し医学博士号を取得した後、1919年に帰国、ラングーン総合病院の医官として採用され、その後も植民地政府の医療系官僚としてビルマ各地で活躍した。

第4章「社会的諸活動と教育の成果」では、バプティスト派が中心になって行っていた「Our Day」というクラブや禁煙協会などの社会活動について事実を掘り起こし、Our Day がスポーツを通じてカレン族の民族意識を醸成していったことを明らかにした。また、バプティスト派やカトリック教会が週刊のカレン語新聞を発行したこともカレン族としての意識の醸成に貢献したことは間違いのない。そうした意識の醸成にともなう、カレン族の民族団体が創設されていく。

4章の後半は、カレン民族協会の創設とその活動についてさまざまな事実を明らかにしている。アメリカに留学後バセインのスゴー・カレン高校の校長をしていたタンビャンらが中心になって1881年に設立されたカレン民族協会は当初はカレン族間の友好意識を高めることを主たる目的としていたが、1930年代には、ビルマ族の民族意識の高まりに刺激を受けて、カレン族としての民族意識を高らかに主張していくようになる。その意識の高まりを代表するものが、カレン族新年の祝日化の要求、カレン族の民族旗、カレン族の民族歌の制定である。

これらの考察を踏まえて、結論では、キリスト教各派の諸活動だけでなく、受容する側のカレン族のほうにも、積極的に子供たちを学校に送り込み、保健衛生活動に参加していったことが明らかにされ、カレン族の側の受動的ではない積極的な意思をとまなうキリスト教の受容であったことが述べられている。

学位論文審査結果の要旨

審査会は2019年6月20日に、土口史記（主査）、渡邊佳成（副査）、徳永誓子（副査）の学内審査委員3名、学外審査委員土屋洋名古屋大学准教授によって行われた。本論文の審査結果は以下の通りである。

本論文の最大の功績は、これまでほとんど注目されることのなかった英領植民地期の下ビルマデルタ地方におけるキリスト教の諸活動に焦点をあてて、その教育活動、医療保健衛生活動、社会活動の諸事実を丹念に掘り起こし、少数民族であるカレン族がキリスト教を受容していった足跡の全容を初めて明らかにし、その受容が受動的なものではなくカレン族の側から積極的に受容し自らの少数民族としての地位を高めていったことを指摘したことである。

本年1月の予備審査において指摘された、(1)全体として叙述が平板でやや概説風な論の進め方が散見する、(2)これまでの研究史整理が不十分で、論点が明示されず、したがって結論の重要性が読者にはわかりにくいなど、論文としての叙述、論の進め方を工夫する必要がある、という点は、本論文では修正され、上記の結論も判りやすい形で提示されていた。

また、内容について指摘されていた、(3)キリスト教諸派の教育活動、保健衛生活動については詳細に論じられているが、それらがカレン族のキリスト教受容にどのように結びついたのかが明示的に示されていない、カレン族の動向が系統立った形で叙述されるべきである、(4)論文でも言及されている少数民族としてのカレン族の民族意識の覚醒についてさらに深い検討が必要であるなどの点も、それぞれ、十分に考慮に入れて論が進められていた。

その結果、本論文では、以下のような重要な成果が得られたと高く評価された。

(1) 史料の発掘という点では、植民地政府の公刊記録のみならず、キリスト教各団体の内部文書、カレン語の史料、関係者の一族からの聞き取り調査など、新たに見いだした史料を駆使して事実を実証的に明らかにしていったことがまず高く評価された。

(2) ミッションスクールについて、首都ラングーンのミッションスクールの事例から英語による授業が行われ植民地官僚や教師、弁護士などいわゆる新中間層を輩出したエリート養成機関としての側面が強調されてきたが、本論文の考察によって、地方では、そうした性格を持つ学校が存在する一方、英語＝カレン語による授業、一部ではビルマ語による授業などが行われ、技術・家庭科などの科目も重視される学校も多く存在していたことが明らかになり、植民地下の教育を地方の事例から総合的に考察することの必要性が明らかとなったことは重要である。

(3) 学校の運営面でも、植民地政府の補助金のみならず、自前の資金を調達し自弁で学校を運営していくために、製材所や精米所を経営したり、印刷工場をつくりカレン語の新聞雑誌を発行したりするなどの新事実を明らかにし、また、そこでは生徒が実習を兼ねてさまざまな職業訓練を受けていたことも明らかになったことは評価に値する。

(4) 宗教、教育、医療保険衛生活動のそれぞれにおいて、デルタ地方では、1930年代の前半には、それぞれの活動の中で育ってきたカレン族の牧師、教師、医師、看護師などが、イギリス人やアメリカ人にとってかわり、諸活動の中心にカレン族の人びとが携わるようになる「土着化」が進行したことが明らかになった。それは、デルタ地方にとどまらず、一部の牧師や教師、看護師たちはミャンマー北部、西部の山地地域に入っていきチンやカチンなど他の少数民族のキリスト教受容にも大きく貢献した。おそらくこうした動きの中で、第4章で述べられるカレン族の民族意識が高まっていたことが想起される。

(5) 医療分野で傑出した存在になっていた人物の事例を紹介しているが、そのうち、バタンチェインについては、関係者の聞き取り調査などによって、本論文ではじめて詳細な事績が明らかになった点は評価されるべきである。

(6) カレン族の民族意識覚醒について、従来は、イギリスからビルマが独立する際にカレン族の分離独立を主張したカレン民族同盟 (KNU) の存在が強調されてきたが、本論文では、それよりもずっと以前 (1881 年) に親睦団体として設立されたカレン民族協会 (KNA) に注目しその創設にデルタ出身のカレン族が多く関わっていたこと、1930年代半ば以降に KNA は政治志向を強め、カレン族新年の祝日化、カレン民族の歌の制定、カレン民族の旗の創設などを主導していったことを新たに発掘した史料に基づいて明らかにしたことは大いに評価できる。

以上のごとく、英領植民地期の下ビルマデルタ地方におけるキリスト教の諸活動について、多くの新しい事実を発掘しただけでなく、植民地期のビルマ全体における教育システム、各民族のキリスト教受容、民族意識の覚醒などについて、これまでの歴史を書き換えることにつながる視点をも提示したという点で、本論文の意義は大きい。しかし、その一方で、審査会でも指摘されたように、以下のような残された課題もあり、それを解消した上で、植民地下の各民族のキリスト教受容の歴史を書き換えるような画期的な研究の完成を期したい。

一つは、残された史料が少なく、また、文書館の公開に一定の制限があるため、限られた史料の中での分析は致し方ないことではあるが、初期のキリスト教受容の拡大、停滞について具体的な数値が得られていない部分があったり、各レベルのミッションスクールのより詳細なカリキュラムが明らかになっておらず、教会の文書や当時使われていた教科書など、より一層の史料の発掘の必要性が指摘された。

二つは、さまざまな事実の発掘は称賛に値するが、その新たに得られた事実が歴史的にどういう意味を持つのか、それぞれの章は完結しているが論文全体としての論の構成がまだ未熟であるなど、考察の結果得られた事実の歴史的意義が十分に説明されていない部分があることが指摘された。

三つは、第4章で述べられた社会活動が、キリスト教の受容とどのように関わるのか、章の後半で詳述される民族意識の覚醒とどのような関係があるのか不明な部分が多く存在し、教会の社会活動について、特に、カレン語の新聞や雑誌の発行がキリスト教の受容や民族意識の覚醒にどのような影響を与えたのかを解明すべきであることが求められた。

以上、さらに大きな研究の完成に向けての幾つかの発展的な指摘がなされたが、審査委員全員一致で、本論文自体は高度な専門性や独創性を有し、今後の展開が十分に期待できるものであり、博士論文として十分な水準に達しており、博士の学位にふさわしいものと判定した。